

研究・調査報告書

報告書番号	担当
1 4 5	滋賀医科大学社会医学講座福祉保健医学部門
題名 (原題/訳)	
<p>Validity of self-reported drinking before injury compared with a physiological measure: cross-national analysis of emergency-department data from 16 countries. 検査結果と比較した傷害前の飲酒に関する自己申告の妥当性について：16 カ国の救急部データを使った横断研究</p>	
執筆者	
Cherpitel CJ, Ye Y, Bond J, Borges G, Macdonald S, Stockwell T, Room R, Sovinova H, Marais S, Giesbrecht N.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
J Stud Alcohol Drugs. 2007 Mar;68(2):296-302.	
キーワード	
自己申告による飲酒情報の正当性、傷害、血中アルコール濃度	
要 旨	
<p>目的： 救急部を受診する患者の自己申告による飲酒情報は、飲酒と傷害の関係を調査するにあたり広く用いられている。しかし、患者の飲酒に関する自己申告と傷害のタイプの間に関連があるのか、もしくはこれらの関連が地域や国によって異なるのかについてはほとんど知られていない。これらのことを明らかにするために研究を行う。</p> <p>方法： 多重ロジスティックモデルでは、自己申告の妥当性は、血中アルコール濃度(BAC)陽性に対してどの程度自己申告でも陽性に出るかという事で判断された。研究は 16 カ国にわたる 28 研究を対象に、44 箇所の救急部において行われた。対象者は、Emergency Room Collaborative Alcohol Analysis Project (ERCAAP) と the World Health Organization Collaborative Study of Alcohol and Injuries の 2 つから集められた 10,741 人とした。データは、傷害にあうまでの 6 時間以内に関する自己申告の飲酒情報と呼気分析による血中アルコール濃度を比較して解析された。うち、二つの研究については呼気ではなく尿を用い、血中アルコール濃度について検討した。共変数として、人口統計学的、飲酒、及び傷害に関する特徴と、どの程度社会で飲酒が認められているかといった文化的な要素を用いた。</p> <p>結果： 個人レベルの解析では、BAC が高いほど、飲酒したと申告する率が高く、多く飲酒した人ほど交通事故や、暴行などで持続的な傷害を受けることが多かった。各研究レベルの解析では、平均 BAC が異なっても社会文化的背景が異なっても、自己申告による飲酒情報の適合率、すなわち妥当性とは関連がなかった。</p> <p>結論： この研究により、救急部における横断調査を行った場合、血中アルコール濃度によって裏づけられた自己申告による飲酒情報に妥当性があることが示された。</p>	